オピニオン opinion

教師は「プロ教師」の育成を

一般財団法人 いじめから子供を守ろう！ネットワーク
代表 井澤 一明

ソチオリンピックの話題が新聞のスポーツ欄を賑わせている。また、ヤンキースに移籍した田中選手等のプロ野球の話題も多い。

その中に、イチロー選手や引退した松井選手のバットを長年手がけてきた「バット職人」久保田五十一さんが「後継者の育成にめどが立った」として引退を公表したという記事があった。先を歩む者としての責任を果たした姿が目に浮かぶ。

プロの教師として

「学は人たる所以（ゆえん）を学ぶなり」という吉田松陰の言葉が遺されているように、教師の使命とは「人を育てる」ことに尽きる。それは、教育を通して子供たちを立派な社会人として世に送り出すということでもあろう。

子供たちは学校で「努力の大切さ」や「学ぶことの喜び」を味わう。言葉を換えれば、教わることの喜びを知るのである。

当然ながら教師にとっても、子供たちが立派になっていく姿を見ることは教師冥利に尽き、社会への貢献を成したと言える。

教師の一言、目の輝き、歩き方等、教師の一挙手一投足は生徒に「伝染」する。今も昔も「学舎」は、師弟愛が生まれる最も大きな場であろう。

昔から言われることであるが、教師は生徒の「鏡」なのだ。子供たちが正しい姿を映せるように、毎日毎日、鏡を磨き、歪みを正す姿勢を見せてあげていただきたい。

その背後には、日々、授業をより良いものへと工夫し続け、更に自らも学び続ける先生方の並々ならぬ精進が隠されている。自分を磨き続けている先生方の、目に見えない努力に深い感謝を覚えるものである。

いじめ対策を期待する

努力を重ねている教師にも、いじめをはじめとする子供たちを取り巻く問題については、教師の責任のみを問われるのは不本意であるという考え方もあろう。

だが、「困った家庭」を教育する場は今の日本には見当たらない。また現実に、いじめの九割以上が学校で起きている。保護者としては学校、教師に期待するしかないのだ。

学校では、新任であっても学級担任になれば、「一国一城の主」と言われる。その弊害なのか、自分でいじめに対処できない状況であっても、他の人のアドバイスを受け入れない教員も多い。

また、やる気はあっても教師が対処を失敗し不登校にしてしまったケースもある。いじめの対処方法を知識として学んでいれば、違った結果になっていたことが予想される故に残念でしかたがない。

この視点から見ると「教師を育てる」ということに、より多くの時間を費やす必要があると思う。

「いじめ防止対策推進法」に頼らなくても良い実力のある「プロ教師」を育てることは、教師にしかできない。子供たちのために「人が育つ」と言われる教育界を創りあげていただきたい。